

児童の表現力の向上に向けた組織的な学校改善を目指して

～国語科の授業改善を軸とした言語能力の育成を通して～

留萌市立潮静小学校
学級数 10
(校長 田中 克幸)

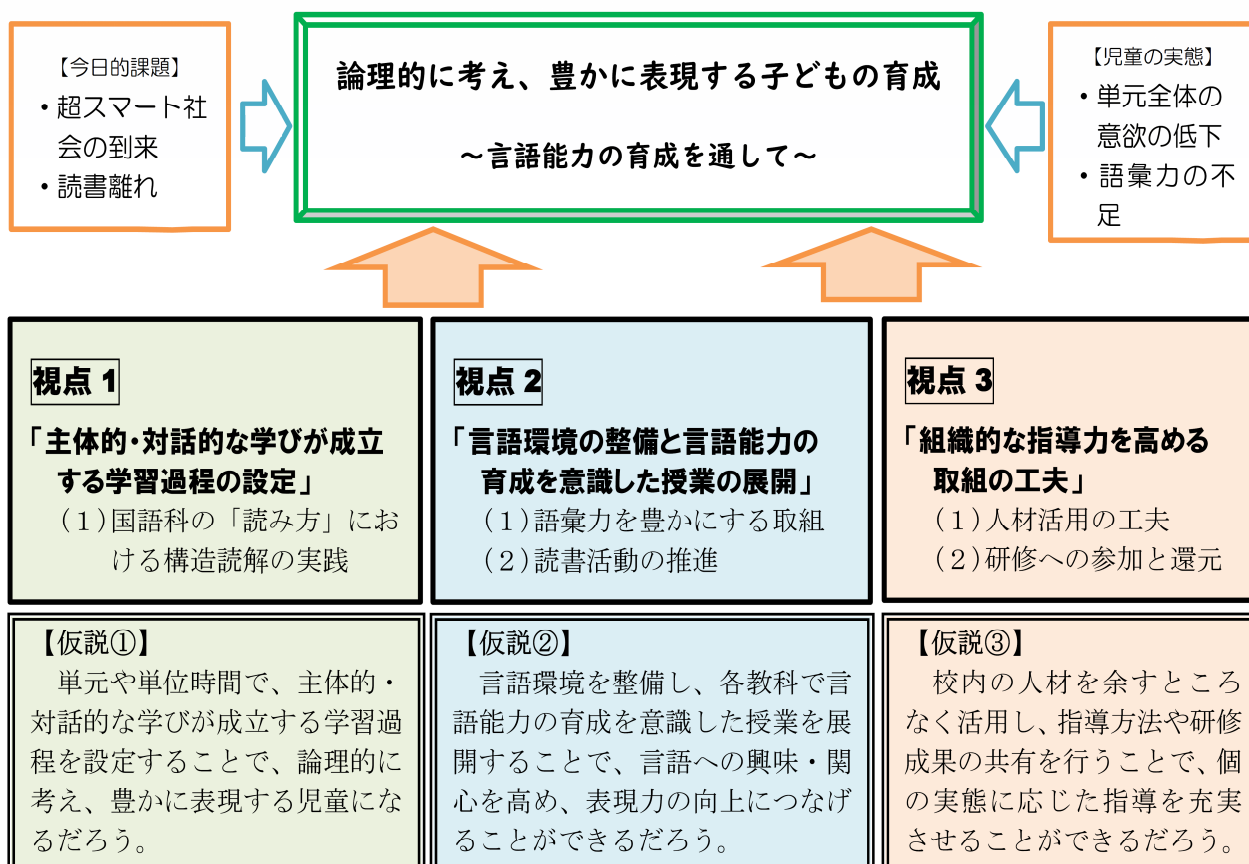
I はじめに

本校は、目指す児童像「かしこく」「やさしく」「たくましく」の実現に向け、平成30年度から児童の表現力の向上を目指し、豊かな語彙力を身に付け、学習の基盤となる言語能力の育成を図るため、組織的な学校改善に向けた取組を推進している。

具体的には、教育活動全体で、言語能力の育成に係る環境整備を進めるとともに、言語能力を育成する中心的な役割である国語科の授業改善を図り、児童が豊かな語彙力を身に付け、正確に理解し適切に表現する資質・能力の育成を図っている。

とりわけ、本校の児童が自分の思いや考えを適切に表現することが難しい実態から、児童の表現力の育成において、様々な文献等から、必要な情報を読み取り、表現を工夫することができるよう、読む領域に関する研究を推進し、教職員全体で実践的指導力の向上に向けた取組を進めることとした。

II 実践テーマの全体図

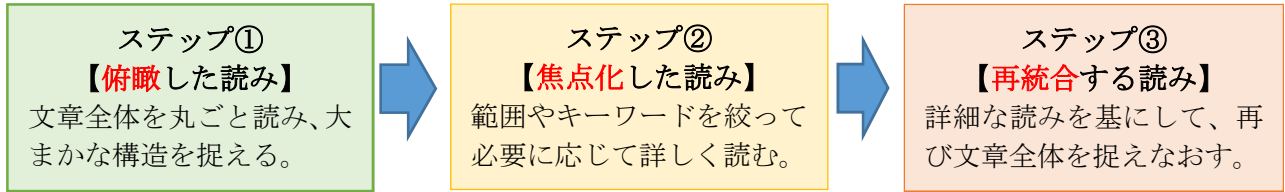


III 実践の概要

1 主体的・対話的な学びが成立する学習過程の設定

(1) 国語科の「読む」領域における構造読解を基盤とした資質・能力の育成

「構造読解」とは、文章全体を捉えるために、児童が分析的に文章を読むことができるようにするための取組である。単元の指導計画において、文章の全体の構造を捉えることができるよう、以下の3つの段階に分け、児童の思考に沿った指導を行うことで、児童が豊かに読むことができることを目指してきた。



(2) 構造読解の実践 6年生「きつねの窓」単元計画

時	単元の流れ
1	<p>St.1【俯瞰した読み】</p> <p>① 単元の言語活動についての見直しをもつ。 ② 文章の構造と登場人物を把握する。 ③ スイッチと主人公の変容をおさえる。</p> <p>文章全体を丸ごと読み、文章の構造と内容を把握する。</p> <p>○単元の言語活動について見直しをもち、話の大まかな体容と構造を捉える。 ・一人称視点 ・前置詞句の強調</p>
2	<p>○登場人物と作品の構造を理解し、スイッチを確認する。 ・登場人物（ぼく、きつね） ・非日常世界への入り口（道を一歩がったとき） ・非日常世界からの出口（林の道を歩いて行きました）</p> <p>・登場人物を出てきた順番に挙げる。 ・語り手の位置付けをする。 ・スイッチを確認。</p>
3	<p>○「ぼく」の変容を把握する。 ・環境 ・心情</p>
4	<p>St.2【焦点化した読み】</p> <p>主人公の変容を生み出したファンタジーの世界の役割を考える。 ④ 心情が大きく変わったポイントをおさえる。 ⑤ 窓の中に見えていたものを比較する。 ⑥ 色の影響を考える。</p> <p>必要に応じて詳細に読む。</p> <p>○「ぼく」の心が大きく変わったところを捉える。 ・気分よく、旅路をきつねにやりました。</p> <p>・クライマックスを確認。 ・場面を対比して共通点や相違点を確認。 ・伏線となっている表現を確認。</p>
5	<p>○ぼくときつねの窓に映ったものを比較する。 ・共通点がある。 （今はもう手に入らないもの、大切なもの、悲しいもの）</p>
6	<p>○本文中に出てくる「色」が物語に与える影響をつかむ。 ・さびしい ・切ない</p>
7	<p>St.3【全体を再統合する読み】</p> <p>⑦ 主人公の姿容と非現実世界の場を捉え、作中の主題を自分の言葉で表現する。 ⑧ 教語に対しての自分の考えを自由に発表する。</p> <p>これまでに読みとったことを基に再び全体を見直しして読む。</p> <p>○作中の主題をとらえ、交流する。 ・「ぼく」の変容 ・窓に映ったものの共通点 ・色</p> <p>・「変わったこと」に着目し、主題を予想し自分の考えを表す。 ・場面・文・人物の役割、必要に応じて考える。 ・物理的象徴となっているものについて自分の考えを表す。</p>
8	<p>○読書座談会を開く。</p>

ステップ①

既習の構造との比較を行い、異なる場合はどの部分が異なるのかを明らかにできるようにした。事例では、5学年の「雪わたり」で学習した構造と同じファンタジー型であることを押さえた上で、既習事項を生かし、非日常世界へ変わる場面や場面転換の存在などを確認できるようにしている。

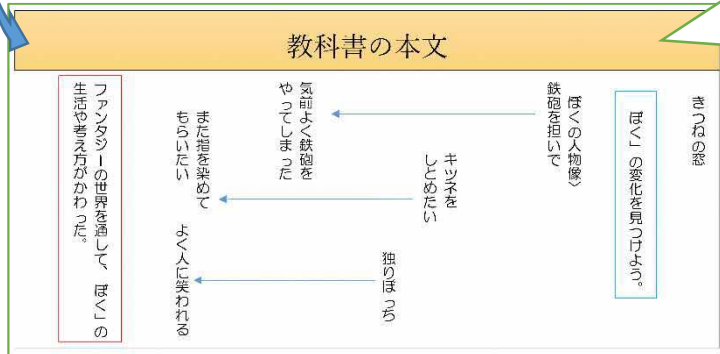
ステップ②

ステップ①でとらえた構造をもとに、必要に応じて文章を詳細に読むことができるようにした。「焦点化」とは、特定の事柄に焦点を当てることであり、ここではクライマックスの場面や場面の対比による共通点や相違点などについて焦点化している。

ステップ③

ステップ②の詳細な読みを基に、再び物語全体を見直し読むことができるようにした。物語の設定や題名に関する発問を通して、児童は作品全体を捉え直したり、自分なりに作者の意図への考えをもったりすることができるようにしている。

(3) 板書計画



3時間目の板書計画。主人公の変容を捉えることができるよう、教科書の本文を掲示し、児童が本文から関連する箇所を見出すことができるようにしている。



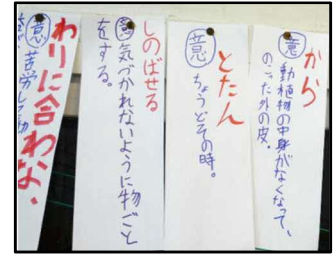
【板書の工夫】

2 言語環境の整備と言語能力の育成を意識した授業の展開

(1) 語彙力を豊かにする取組

① 掲示物の工夫

難解語句や新出漢字を教室内に掲示して、いつでも確認できるようにしている。また、授業中に繰り返し意味を確認したり、同じ意味の言葉を児童に考えさせたりして、「分かっているつもり言葉」を「使える言葉」にできるようにしている。



【掲示物の工夫】

② 教材の工夫

語彙に対する興味・関心を高めることができるよう、クロスワードや言葉探しなどに取り組みできるようにしている。具体的には、プリントを用意して、15分の帯学習の時間を活用して、短時間で行うことができるようにしている。

③ 学習用語の統一

国語の物語文と説明文の学習用語を、どの学年で、どのような定義で指導するのかを全教職員で共通理解できるように、学習用語を統一した。学習用語は、実践を基に見直し、改善している。

瀬静小の研究における必要な学習用語 【文学的文章】 R1/11/5 改訂					瀬静小の研究における必要な学習用語 【説明的文章】				
用語	言い換え	低学年	中学年	高学年	用語	言い換え	低学年	中学年	高学年
人物					話題	誰が・何が			
登場人物	お話しに出てくる人物	○	○	○	主語	誰が・何が	○	○	○
中心人物	主役・主人公	○	○	○	事柄・事例		○	○	○
対人物		○	○	○	実験・観察		○	○	○
人物像	人柄・性格	○	○	○	話題提示	○○の話			
主題	題が	○	○	○	形式段落		○	○	○
叙述文		○	○	○	意味段落	大段落	○	○	○
作品構造		○	○	○			○	○	○
くり返し(語)		○	○	○	文章構成				
事件(語)		○	○	○	問い	問いかけ・問題	○	○	○
場面(語)		○	○	○	答え		○	○	○
場面	話のまとまり	○	○	○	序論・本論・結論	はじめ・中・終わり	○	○	○
場		○	○	○	あたま型	頭括型	○	○	○
クライマックス	山場	○	○	○	おしり型	尾括型	○	○	○
設定		○	○	○	あたまおしり型	双括型	○	○	○
伏線	手がかり	○	○	○	しんかんせん型	時系列型・列挙型	○	○	○
あらすじ		○	○	○	文章構成図		○	○	○
メルヘン	童話	○	○	○	つながり		○	○	○
ファンタジー	空想	○	○	○	要素				
読書・非読書		○	○	○	読者	書いた人	○	○	○
スイッチ	合図	○	○	○	中心文		○	○	○
作者		○	○	○	要点		○	○	○
語り手	話者	○	○	○	要旨		○	○	○
視点(じゆんぶ)		○	○	○	小見出し		○	○	○
		○	○	○	章・篇目		○	○	○
		○	○	○	主題・事例		○	○	○
		○	○	○	接続語		○	○	○
		○	○	○	文末表現		○	○	○

【学習用語の統一】

(2) 子どもの読書への興味・関心を高める取組

① 読書の木・読書通帳

児童が読んだ本の題名とおすすめ度を書いて貼り出し、他の児童が本を選択する際の参考にできるようにしている。また、貼り出す紙を葉に見立て、学年ごとに木の幹に貼り、学年ごとの読書量を見えるようにしている。さらに、自分の読んだ本を「読書通帳」に記録して、これまでの読書量を自分で確認できるようにしている。



【読書の木】

② お話し会

教職員が趣向を凝らした読み聞かせを定期的に行っている。教師がおすすめの本を紹介したり、小道具を用いて話したりするなど、多様な読み聞かせを行っている。



【お話し会の様子】

③ 親子読書の日

親子で一緒に本を読み、楽しさや心地よさを児童と共有できるように、親子読書の日を設定して、各家庭に協力をお願いしている。家庭で読んだ本も読書通帳に記入して、保護者が、児童の読書量を確認できるようにしている。

本の題名	出版社	担当
1. オム、カエリやカエリ	イノコ出版	本郷
2. うえきばちず	R 出版	飛鳥部
3. たべやあひる	教育画報	小澤
4. しろくまのパン	エブリシング出版	村田
5. 小さな星のうた	早川書房	小野
6. ぼくは	角川文庫	大矢
7. ぼくは	角川文庫	中村
8. ぼくは	角川文庫	校長

【お話し会の本の紹介】

3 組織的な指導力を高める取組の工夫

(1) 校内の人材活用の工夫

① 帯学習の取組に向けた日課の工夫

週3回、中休み後の15分間を帯学習に設定し、各学級で読書や学習の補習等を行っている。その時間を活用し、主に基礎・基本の定着を目的として、一人で学習に取り組むことが難しい児童に対して全教職員が可能な限り個別・少人数指導に携わることができるよう、日課の工夫を行っている。



【帯学習の様子】

② 校内研修の充実

初任段階等の教員が日頃の指導で悩んでいることや実技指導などをテーマに、メンター研修を実施している。研修内容は参加者に事前にアンケートをとり、ニーズに合った内容を取り扱っている。また、版画や書写の指導に入る前に、教材の選択や実技指導の研修も行っている。

メンター研修一覧

- ・ 4月 ICT研修
- ・ 5月 ラジオ体操の指導
写生画の指導
- ・ 7月 成績入力について



- ・ 11月 模擬授業
版画指導
- ・ 12月 保護者対応について
- ・ 2月 複式授業について



(2) 研修の参加と還元

全ての教職員が校外の研修会に積極的に参加できる体制を整えている。最新の教育の動向や本校で活用できる内容等について、参加した職員を講師として、研修してきた内容を全体に還元し、教育活動の充実に生かしている。

9/30 プログラミング教育に関する研修成果の還元



【校内研修の様子】

IV 実践の成果と今後の課題

成果と課題

- 児童質問紙の「国語の授業では、目的に応じて文章を読み、感想や考えをもったり自分の考えを広げたりしていますか。」という項目において、肯定的な回答の割合が100%であることから、文章全体を捉えるという取組に児童が手応えを感じていることが伺える。また、「国語の授業では、言語の特徴や使い方についての知識を理解したり使ったりしていますか。」という項目においても、肯定的な回答の割合が90%を超えており、児童の国語科への学習意欲が極めて高いことが分かる。
- 児童の様子を客観的に捉えた教職員アンケートでは、「文章全体を捉えたうえで、必要(課題)に応じて読むことができています。」という項目において、肯定的な回答の割合が4段階評価で3.5であり、1単位時間の課題と単元全体との繋がりを児童が意識できていることが伺える。
- 全国学力・学習状況調査の結果から、児童全員が時間内に全ての問題に取り組み、空欄がなかったことに加え、回答類型99のミス(何も分類されない見当違いなミス)は国語・算数ともに5%台であったことから、全体を大まかにつかむための読みの力が高まっていると考えられる。また、文章の構成に関する設問の正答率が90%であり、特に高かった。
- 全国学力・学習状況調査の結果から、「主語と述語の対応」に関する設問の正答率が45%、「引用文の出典の記載」に関する設問の正答率が10%など、課題が見られた。作文やノート指導の充実を図るとともに、日常生活や各教科の指導において、児童の実態に応じて正しい日本語の使い方を指導していく必要がある。